近代末期の普請・建築文書に見る町家の建築総費用と祝儀の関係

—昭和9.(1934)年建築, 和歌山県橋本市上田家住宅中央棟の場合—

THE RELATION BETWEEN BUILDING COSTS AND DONATIONS
BY THE CONSTRUCTION DOCUMENTS ON THE END OF MODERN TOWNHOUSES

—Case study of Ueda house (1934), Hashimoto, Wakayama—

梅 嶋 修*, 平山育男**, 御船達雄***

Osamu UMEJIMA, Ikuo HIRAYAMA and Tatsuo MIFUNE

Ueda house built in 1934, Hashimoto, Wakayama still has four construction documents.

The documents proves several economical points of building Ueda house, as follows;

1. The building costs were 5,418.44 yen.
2. The donations consisted of money and articles. The articles could be converted into money, as a result the donations totally valued approximately 576 yen, which was 10.6% of the building costs.

Building construction in the end of modern times must be based on monetary system; however this case study of Ueda house indicates that the mutual support in early modern times still remained as donations.

Keywords: Hashimoto city, Townhouses, Modern times, Construction, Document, Donations

橋本 町家 近代 普請 文書 祝儀

1 はじめに

和歌山県橋本市中心市街地にあたる橋本、古佐田、東家は県北東端の紀ノ川上流地域に位置する。紀ノ川水運と高野街道、大和街道の交差する交通の要衝として繁栄し、近世から近代にかけての良質な町家、長屋が多数存在する。しかし、この地域は都市再開発計画に伴う区画整理事業によって、江戸時代以来の古い町並みが消失の危機にさらされており、市の委託事業として平成11(1999)年より平成14(2002)年までに町並み調査を実施した¹⁾。

上田家中央棟²⁾(昭和9・1934年建築)は所有者のご厚意によって、平成12(2000)年6月18日に建築調査を行い、中央棟に関して、以下に記した4冊の建築工事に関する文書が確認された。

A「建築用金銭出入簿」	B「材料買入日記」
C「祝」	D「材木控」

これらの文書は建築総費用と支出経過の算出(A、B)、建築材料購入及び職人作業への勘定の明細(B、D)、祝儀³⁾の明細(C)、購入材木の種別(D)といった建築工事の主たる記録項目を備えた貴重な資料と考えられる。本論は、これらの文書をもとに上田家中央棟建築工事の沿革を概説すると共に、中でもA「建築用金銭出入簿」、C「祝」に着目し、近代末期(大正時代～昭和時代初期)の地方在郷町における町家の建築総費用と祝儀の関係を論じるものである。

図1 上田家住宅位置図

2 既往の研究

本研究で扱う文書は、既往研究において、いわゆる「普請文書」「普請帳」⁴⁾と呼ばれるもので、これらは建物の新築、改築、修理、移築などの建築工事に際して残された記録である。

民家史研究においては、普請文書の読解によって多大な成果が得られることが周知されており、現在は多数の論考を見ることができ

本稿の内容の一部は梅嶋修ほか3名：近代の建築文書に見る町家の建築費用と祝儀の関係、2002年度大会(北陸)学術講演梗概集F-2, 日本建築学会, pp.187~188として発表している。

* (株)グリーンシグマ 修士(造形)
** 長岡造形大学造形学部環境デザイン学科
助教授・博士(工学)
*** 和歌山県文化財センター 技師・博士(工学)

Member of Green-sigma Co., Ltd., M. Design
Assoc. Prof., Dept. of Environment Design, Faculty of Design, Nagaoka Institute of Design, Dr. Eng.
Center for Cultural Properties in Wakayama Prefecture, Dr. Eng.

る。しかし、その多くは近世に遡る民家に対するものが重要視され、近代における民家の普請・建築文書⁶は等閑視される傾向にあり、内容の整理・分析を伴わない場合が多い。近代の資料で取り扱われるものには、公共の官舎や資産家の邸宅に関するものが確認できるが⁶、ごく一般的な民家を対象とした論考を見出すことは困難であるといっても良い状況であろう。

このような中でも『近代和風建築 智頭の石谷邸』は先駆的な研究として挙げることができ、近代における大規模且つ長期にわたる民家建築の工程を詳細に整理・記録する⁷。それに加えこの論考では近世における「普請」の記録が民衆の相互扶助を前提として供給された労働力の控えが主であるのに対し、近代の「建築」によって残された記録は貨幣経済の中における経済行為として金銭の支出が中心となったため、その内容、性質、社会的意義が変化したことと言及している⁸。但し、この例は上層の地主の住宅建築に関する例であり、近代の一般的な民家の建築工事状況を示すものではない。

近代における農家の普請文書の読み下しと解説を掲載する報告も見られるが、近代の農家では労働力の相互扶助と建築資材の供給が行われており、基本的には未だ近世普請の範疇であるといえる⁹。

一方、近世の町場における普請について建築総費用と祝儀、各々を整理した論考を見ることはできるが、建築総費用と祝儀双方の関係性を論じるものは見ることができなかった¹⁰。

以上の点を考慮すると、本論は和歌山県橋本市という地方在郷町における一町家の研究という範疇に留まらず、全国的な普請・建築文書に関する先駆的な研究といえ、また、近世から近代にかけての建築工事を通じた地域社会構造の変化等を普請・建築文書類から紐解くといった観点も含め、意義を持つといえる。

3 建物の概要

上田勝規家住宅は旧大和街道である本町商店街に南面し建てられる。家業は聞き取りから弘化4(1847)年より代々布団販売店を営むとされる。街道に面しては3棟の建物を所有しており、中央棟は間口6間半あった旧主屋の西半分を取り壊して昭和9(1934)年に建築し、東棟は昭和39(1964)年に残った東半部分を壊して新築した。西棟は旧来からある建物で、明治時代後期頃の建築と考えられる。現在、東棟に店舗と住宅の機能を備え、中央棟はその倉庫として、西棟は戦前から貸家としていたが、昭和48(1973)年頃からは同家の車庫兼倉庫として使用したという。

以後は本稿で取り扱う普請・建築文書の残る中央棟の敷地内建物について詳述する。

中央棟は間口3間、奥行5間半(内、裏側半間は下屋庇)の切妻造平入二階建て、正面側に下屋庇は無く、小庇を付けるのみとする。二階表側壁面は定規筋を入れた黒漆喰塗仕上げとし、軒は出桁で垂木を角形に塗籠める。また、二階表側両端には袖壁を設ける。

一階は前土間の形式で、下手側に通り土間を配し、上手裏側に6畳を1室配する。通り土間は、中央棟から下手裏側に角屋として突出する台所棟を介し、裏側に配される土蔵入口まで続く¹¹。上手側下屋庇からは廊下が配され、便所、風呂へと繋がる。これら中央棟、付属屋に囲まれた敷地中央には中庭を配する。二階は一列三室型で座敷を構え、最も裏側の部屋、下手側に床の間を備える。土蔵は最近の改造で茶室として使われており、二階から南側には木骨モルタ

ル製のベランダが表側へ中庭まで迫り出している¹²。

なお、中央棟の延べ床面積は121.59㎡=36.78坪(一階63.54㎡=19.22坪、二階58.05㎡=17.56坪)、普請・建築文書から判明する昭和9(1934)年の工事範囲の延べ床面積は、付属屋を含め161.18㎡=48.76坪となる¹³。

ところで、中央棟の小屋組棟木には上端に小返りをとる五角形断面で、和釘が1本打たれた旧建物と考えられる古材の一部、約30cm程が針金で結ばれていた。これは火災除けに旧住宅のものをを用いたのであろうか。類似する話は千年家と呼ばれる国指定重要文化財建造物の古井家住宅(兵庫県宍粟郡安富町)にも伝承される¹⁴。

4 文書の概要

上田家に残された4冊の普請・建築文書はペン書き、毛筆書きの違いはあるが¹⁵、同一筆跡と判断でき、当時の当主である上田伊助が残したものと考えられる。これら上田家文書は情報量が非常に多く、かつ詳細に記述されている。建築工事は布団販売を業とする当主にとっては専門外のことであるが、詳細で丁寧な記録は当主の誠実な人柄と几帳面な性格が表れた資料といえる。以下に各記録の概要を示す。

A「建築用金銭出入簿」

昭和八年十一月三日

縦240mm×横160mm、全14葉、ペン書き

建築工事の出金について、「年月」「摘要」「出金額」「合計(小計)」を表形式で記す。全体は2部に分かれ、前半には中央棟建築に関する昭和8(1933)年11月2日から昭和10(1935)年4月22日までの出金(合計5418円44銭)、後半部分には「改修費」とされる昭和10(1935)年6月30日から同年9月30日までの出金(合計440円)が記録される。

B「材料買入日記」

昭和八年十一月三日

縦160mm×横118mm、全77葉、毛筆書き

材料購入に際する出金に関して、購入元、購入品と数量、単価、小計(単価×数量)、合計、支払い年月日を箇条的に記す。建築総費用の算出はA「建築用金銭出入簿」によって行われているため、当文書はその明細と考えられる。なお、表題には「材料買入」と記すが、材料だけでなく工事に関わった職人の作業に対する勘定も記録される。

C「祝」

昭和九年三月

縦132mm×横193mm、全107葉、毛筆書き

昭和9(1934)年3月5日から昭和19(1944)年7月15日までの上田家に関する冠婚葬祭の参加者名簿、祝儀¹⁶が箇条的に記録される。全107葉中、2葉裏から31葉裏までの29葉半について当建築工事関係の祝儀の明細が記載される。上棟式の記録より、大工、左官共に地元の業者で、それぞれ平野常吉、山本徳市が携わったことが明らかとなる。

写真1 上田家住宅中央棟：南東より

写真4 上田家住宅中央棟一階座敷：南東より

上：写真5
上田家中央棟二階座敷：南西より
下：写真6
上田家小屋裏：古材の一部

左：写真2 上田家住宅西棟：南西より
右：写真3 上田家住宅東棟：南西より

図2 各普請・建築文書表紙

A「建築用金銭出入簿」

B「材料買入日記」

C「祝」

D「材木控」

図3 C「祝」の記載例 (5葉裏～6葉表)

図4 上田家配置図 S:1/600

図5 上田家中央棟平面図 S:1/300

図6 上田家中央棟梁間断面図 S:1/300

※図4～6において□の範囲は昭和9 (1934) 年の工事範囲に含まれない。
写真撮影：田村収

D「材木控」

年号無し

縦 240mm×160mm、全 8 葉、ペン書き

建築に際して購入した材木の「名称」「材料（材質）」「長」「幅横、厚高、末口」「個数」「適要」を表形式で記す。

5 建築工事の概略

中央棟の建築工事に関する工程を普請・建築文書から明確に判明する工事内容・儀礼と、金銭支払いの記録を考慮して簡単にまとめ、以下に概略を述べることとする。

昭和 8（1933）年

11 月 2 日 材木購入、大工工事、左官工事契約

11 月 3 日 帳簿付け初め

11 月 10 日 チョウナ初め

昭和 9（1934）年

1 月 2 日 方違祈禱

1 月 24 日 現地工事開始

3 月 14 日 ベランダ上棟

3 月 18 日 本宅取り壊し完了、整地

4 月 5 日 上棟式

4 月 11 日 屋根葺き始め

6 月 24 日 落成式

昭和 8（1933）年 11 月初頭に工事契約を行い、帳簿を付け始めた。工事契約後、約 1 週間後には主要材木の製材を始めた。年明け昭和 9（1934）年早々に方違祈禱を済ませ、現地工事を開始し、これより約 2 ヶ月半後に上棟となった。上棟後 1 週間で屋根を葺き始め、材料加工開始から 7 ヶ月半、現地工事開始から丁度 5 ヶ月で落成式を迎えた。なお、工事期間を考慮すればここでの「落成」は屋根工事もしくは左官工事の完了を指すと考えられる¹⁷。昭和 10（1935）年に入ってもなお、電燈、商品陳列棚に関する金銭の支払いが行われるため、中央棟建築に関する一連の工事は昭和 10（1935）年春に終了したと考えられる。

6 建築総費用と祝儀の関係

中央棟の普請・建築文書には、建築総費用の記録として A「建築用金銭出入簿」、祝儀の記録として C「祝」が残される。以下では、これらの文書を整理することで、近代末期における建築工事の建築総費用と祝儀の関係性を考察する。

a 建築総費用の算出

建築総費用は A「建築用金銭出入簿」に記載されるが、前述した通りこの文書は 2 部から構成されており、後半の「改修費」は上田家が所有したいずれの建物に対する支出であるかは明記されていない。まず、この「改修費」が対象とする建物を明らかとして、中央棟の建築総費用を明確にしたい。

改修費が支払われる期間は昭和 10（1935）年 6 月 30 日から同年 9 月 30 日とあり、昭和 9（1934）年 6 月 24 日に落成式が終わって間もない中央棟に関する改修とは考え難い。

中央棟の建築工事が開始された昭和 8（1933）年に上田家が所有

した他の建物は中央棟建築の際に半分が残された旧東棟、現西棟と各付属屋であった。中央棟の落成後は建具屋、畳屋、陳列屋¹⁸など、内装業者が出入りするが、A「建築用金銭出入簿」によれば、改修には中央棟の建築工事を担当したのと同じ大工と左官が改修に関わったことが読み取れた。B「材料買入日記」によれば大工、平野常吉に対する支払いに「拾壱円七十七戈 隠居分 昭和九年七月廿壱日」、左官、山本徳一に対する支払いに「貳拾円九十三戈 陰（ママ）居分 昭和九年七月廿壱日」との記載がある。このことから改修とは、隠居の住居に対するものと考えられる。

聞き取りによれば、西棟は当時、貸家としていたとされる。また、土蔵の改造は戦後間もなくとされた。よって、残った建物の中でも旧東棟が隠居の住居として使用された可能性が高い。中央棟を建築するにあたり、西側半分が切り取られた旧東棟には何かしらの改修が必要であったことも想像にたやすい。つまり、改修とは旧東棟を隠居の住まいとして整える工事であったと考えられた。但し、旧東棟は戦前に売却され、戦後に上田家が買戻すまでは森岡家が入居していたとの聞き取りもあるため、隠居の住居としての使用も僅かな期間であったと判断できる。

この結果、中央棟建築に要した建築総費用は、改修費を含まない 5,418 円 44 銭（坪単価：111 円 12 銭/坪）と考えられるのである。

b 祝儀金額の算出方法

祝儀は C「祝」に明細が記される。ところでこの文書は金銭と物品（特に酒、玄米、白米）の記載よりなるため、祝儀金額の合計を算出することは当初難しいものと考えられた。しかし、各記載項目には贈られた金銭の額面及び物品の下部に小さな文字（金銭の額面、物品）が書き加えられているものが多数あった（図 3）。この数字の意味は一見したところ明らかではなかったが、詳細に検討すると、祝儀が金銭で贈られた際、各記載は「也」で一旦締められ、その下部に小さな文字で金額が記されることから、これは後に書き加えられた「返し」であると考えることができた¹⁹。金銭に関する項目を見る限り、祝儀返しの額面はいずれも祝儀額面の約 1/10 の値となっており²⁰、後段で検証するように物品に対する返しも同じ 1/10 の割合と考えれば、物品を含めた祝儀金額の合計を概算することが可能である。つまり例えば、玄米三俵に対する祝儀返しの額面が三円の場合、祝儀金額は三十円と換算されるのである。

以上の考えに則り作成したものが表 1 である。なお、物品の祝儀に対して返しの額面が記載されないものに関しては、その前後に記載される同種の物品を参考に祝儀金額を比較検討し、表 1 ではこれを（ ）で示した。また、一部の物品には、前後に同種の物品が記載されないため、金銭に換算することが不可能なものもあった。しかし、換算可能であった物品を見る限り、祝儀は 1 円を最低額としていると考えられ、表 1 ではこれを [] で示した²¹。

c 換算価格と実勢価格の比較照合

ところで、物品に対する返しが金銭と同様に 1/10 であるのかは、換算された価格と当時の実勢価格とを照合しなければ検証することができない。そこでここでは特に祝儀として多くの割合を占める酒、白米、玄米について、祝儀返し金額の 10 倍として換算して得られた物品の金額と、上棟式のあった昭和 9（1934）年の実勢価格との比較を行い、その妥当性を考察した。

まず、酒の実勢価格は、昭和 9（1934）～11（1936）年における

表1-1
C「祝」の記載

氏名	祝儀	返し
----	----	----

昭和九年四月五日
本家改築祝儀控

滝脇清太郎	玄米参俵	金参円
滝脇隆居	會閑膳貳拾人前	参円
亀井サキ	金貳拾円也	—
亀井栄助	玄米貳俵	貳円
姓川龜吉	玄米貳俵	貳円
山本雅清	玄米貳俵	二円
岩崎恒太郎	玄米貳俵	二円
亀井常一	玄米貳俵	—
赤沢信太郎	玄米貳俵	二円
堀田庸吉	玄米貳俵	二円
岩崎作三	玄米老俵	一円
岩崎宗三郎	米老俵	一円
堀田常太郎	白米貳斗	五十戈
山本重清	白米貳斗	五十戈
滝脇菊松	白米貳斗	—
高や口 北本幸太郎	白米貳斗	—
高や口 林光一	白米貳斗	—
水野トミ	金参円也	三十戈
堀藤吉	酒五升樽	五十戈
中川恒三郎	金五円也	五十戈
中山豊吉	金参円也	三十戈
平野徳二郎	金参円也	三十戈
中井熊太郎	酒五升樽	五十戈
土井佐市	酒五升樽 魚ヨコハ一本 塩サバ小一本	老円
後藤	金老円也	十戈
赤沢静也	酒二升	三十戈
中谷信吉	酒貳升	三十戈
伊谷五郎	酒一升	十五戈
米坂政之丞	酒二升	三十戈
山本福松	酒一升	十五戈
芋生重吉	酒貳升	三十戈
鳴戸房七	酒二升	三十戈
田中房一	—	—
藤田義雄	酒五升樽	五十戈
村越米造	—	—
荒井久太郎	酒老升	—
伊都國一	酒老升	—
植田常吉	酒貳升	切手一枚
青木秀夫	酒貳升	切手一枚
池永常三郎	酒参升	—
花乃や	魚三本	三十戈
津守常一	酒貳升	—
竹井徳之助	酒貳升	—
岡本ノブエ	高野豆腐老百個	十戈
平崎	金五円也	—
津守利一	—	—
森下徳太郎	酒老升	—
竹本緑	酒貳升	—
坂本庄一	魚三本目白	二十戈
山本徳一	酒三升	—
大常	—	—
原野良一	酒一升	—
平林登	酒一升	—
織部孝三	酒貳升	—
石井カヤ	酒一升	—
稲葉梅二郎	酒一升	—
小出芳雄	酒二升	—

※本表はC「祝」の内、近隣、親族から贈られた祝儀をまとめたものである。また、実際の文書は箇条的に記されるが、本表は便宜上表形式としている。

表1-2
C「祝」記載の
金銭換算

祝儀	返し
----	----

(単位：円)

2裏

3表

3裏

4表

4裏

5表

5裏

6表

6裏

7表

7裏

8表

8裏

9表

9裏

10表

30

3

30

3

20

—

20

2

20

2

(20)

—

20

2

20

2

10

1

5

0.5

5

0.5

(5)

—

(5)

—

(5)

—

3

0.3

5

0.5

5

0.5

3

0.3

3

0.3

5

0.5

3

0.3

3

0.3

3

0.3

(1.5)

—

(1.5)

—

(3)

(0.3)

(3)

(0.3)

(4.5)

—

3

0.3

(3)

—

(3)

—

(1.5)

—

(1.5)

—

(3)

—

(1.5)

—

(1.5)

—

(3)

—

(3)

—

(3)

—

(3)

—

村上安之助	卵六十個	十五戈
三番組	金五円也	—
小島康代	酒一升	—
小嶋栄一	酒一升	—

七味松之助	板十枚	十五戈
宮井建具店	酒一升	—
のダ 岡本博吉	酒二升	—
蛭本広吉	酒一升	—

野上や	酒二升	—
奈良栄太郎	酒一升	—
秋山繁太郎	酒二升	—
坂口藤太郎	酒二升	—

山本政吉	酒二升	—
田中留之郎	白米老斗	—
北本要	金老百円也	—
神重治	酒老升	—

中村 小林 永橋	酒三升 ブリ老本	老円
岡本喜一郎	酒老升	—
西村芳明	酒老升	—

奥田文吉	酒貳升	—
川原ヨシエ	酒貳升	—
松山製材所	酒貳升	—
前上要之助	酒老升	—
平井ツネ	板十枚	十五戈

土塚桂造	酒貳升	—
(株) 呉服店	酒老升	—
池永武男	酒老升	二十戈
池永龜之助	豆腐老百個	二十戈

神谷生一	酒老升	—
------	-----	---

昭和九年六月二十四日

改築落成祝儀

岩崎梅松	黒塗吸物椀 二十人前	座ブトンカバー 五枚 タメ
岩崎作三	—	—
岩崎惣三郎	—	—
中谷信吉	真カツオ二枚	化粧品組合一箱

滝脇政太郎	ウスバタ花器 及台一組 床掛圖一幅	—
滝脇芳の	赤塗菓子椀 二十人前	夏ブトン二枚
〇一	白鶴酒一升	—

堀仙吉	床置(ダルマ) 及台	鮎二十 サト一斤半
東岡ノ町 二見やす 小谷裕吉	床掛一幅	口フトン地一枚 サト一斤半
織部孝造	白鶴酒一升	—

赤沢信太郎	清酒一升 千魚箱の大一箱	—
小出義夫	白鶴酒一升	二十戈
土井佐市	ビール半打	カバー五枚

村上安之助	丸額ブチ一個	—
米坂政之丞	酒一升	—
中川恒三郎	酒二升	カバー五枚
小泉文一	酒二升券	—

池永常三郎	酒一升	—
堀田庸吉	中皿二十人前 ビール二本	カバー五枚
青木秀夫	ビール六本	五十戈
平野徳二郎	—	—

池永龜之助	菓子券三円也	カバー五枚
竹本緑	酒券一升	カバー二
亀井常一	床掛丹ザク一枚 丸形房持付一個	—

10裏	1.5	0.15
5	—	—
(1.5)	—	—
(1.5)	—	—

11表	1.5	0.15
(1.5)	—	—
(3)	—	—
(1.5)	—	—

11裏	(3)	—
(1.5)	—	—
(3)	—	—
(3)	—	—

12表	(3)	—
(2.5)	—	—
100	—	—
(1.5)	—	—

12裏	10	1
(1.5)	—	—
(1.5)	—	—

13表	(3)	—
(3)	—	—
(1.5)	—	—
1.5	0.15	—

13裏	(3)	—
(1.5)	—	—
2	0.2	—
2	0.2	—

14表	(1.5)	—
-----	-------	---

25裏

[1]	(0.2)
[1]	[0.1]

26表	[1]	—
	[1]	[0.1]
	(2)	—

26裏	[1]	[0.1]
	[1]	[0.1]
	(2)	—

27表	[1.5]	—
	2	0.2
	(2)	(0.2)

27裏	[1]	—
	(1.5)	—
	(3)	(0.3)
	(3)	—

28表	(1.5)	—
	[2]	[0.2]
	2	0.5

28裏	3	(0.2)
	(1.5)	—
	[1]	—

合計 576 32.05

凡例：() は返しの額面が記載されず、前後の記載を参考にしたものを示す。
() は換算が不可能だった物品を含み、祝儀の最低額として換算したものを示す。
— は文書に記載が無いものを示す。

全国の地酒の平均価格が、1.8 リットル (=1 升) あたり、並等酒 1 円、中等酒 1 円 48 銭、上等酒 1 円 89 銭で、灘・伏見のものは上等酒よりも更に上であったとされる²²。これに対し表 1 によると、上田家の祝儀における酒の価格は「五升樽」が 1 升あたり 1 円、「一升」、「二升」と瓶で贈られたと考えられる酒が 1 升あたり 1 円 50 銭、祝儀返しが高値で上等と考えられる酒は 1 升あたり 2 円に換算できることから、酒に関して換算価格と実勢価格はよく整合するものと考えられた。

白米は東京米穀商品取引所調査の東京清算米相場によれば、上棟式が行われた昭和 9 (1934) 年 4 月の白米価格は 1 石あたり 25 円 34 銭²³、1 石=10 斗のため、1 斗あたり 2 円 53 銭となる。一方、表 1 によれば、同時期における上田家の場合、白米は 1 斗あたり 2 円 50 銭に換算され、両者はよく整合する。

更に玄米は食糧管理局『米穀摘要』、東京深川正米市場の内地玄米中米標準相場によれば、昭和 9 (1934) 年 4 月以前に生産されている昭和 8 (1933) 年の玄米価格が 1 石あたり 24 円 90 銭とされ²⁴、1 石=150kg、1 俵=60kg で計算すると 1 俵 60kg あたり 9 円 96 銭の実勢価格となる。表 1 を参照すると、上田家の場合、玄米は 1 俵あたり 10 円に換算され、これも実勢価格をよく反映すると考えられた。

以上の結果より、物品の内、特に多くの割合を占める酒、白米、玄米について祝儀返しの金額より換算を行った祝儀金額は当時の実勢価格によく適合するため、物品における返しも金銭と同じ 1/10 の割合で行われていたと考えることが妥当といえるのである。

d 建築総費用と祝儀の関係

以上を踏まえ祝儀金額の合計を求めると、金銭のみの祝儀金額小計は 145 円、物品のみを祝儀返しの額面から金銭に換算した小計は約 431 円²⁵、祝儀金額の合計は約 576 円となる。

建築総費用 5,418 円 44 銭に対して金銭のみの祝儀金額の割合は 2.7%、物品を金銭に換算して金銭と合計した祝儀金額の割合は 10.6%となる。つまり、上田家の場合、祝儀金額の合計は建築総費用の約 1 割にも達するのである。

前述したように、近世民家、主に農家では地縁血縁を下地とする相互扶助によって普請が行われていた。扶助は材木、茅、縄等の建築資材と労働力の供給という形で行われていた。しかし、貨幣経済の進んだ町場では、早くから建築資材が全て購入され、「見舞」「祝儀」が物品（主に食物）へと移行し、肉体労働力を商品として扱う職種が確立することで相互扶助的な労働力供給を行わない例が見られるようになった²⁶。また、近代初期の農家では、「見舞」「祝儀」を金銭で贈る例も見られ、確実に貨幣経済の波が押し寄せる様を見ることができた²⁷。しかし、このように社会が貨幣経済へ移行する流れの中で、近代末期になっても金銭、物品により、建築総費用の約 1 割もの額が祝儀により宛てがわれることは、割合はかなり後退しているとはいえ、相互扶助の考え方を色濃く引き継いだ行為と見なすことができ、祝儀での収入は一般的な町家にとっては建築資金の一部を補填する重要な要素であったといえるだろう。

なお、B「材料買入日記」には、「愛国生命借金利子 十一年四月二十五日迄」とあり、35 円 75 銭を支払っている。これは、建築工事費の多くには借入金で充当されたことを示すものである。また、上棟式には近所の人々と宴会を開いた記録も残り、建築工事が近隣との関係の上に成り立っていたことも明らかとなった。

7 おわりに

以上、上田家中央棟についての一連の文書より判明した点は以下の通りである。

- 1 建築総費用は 5,418 円 44 銭、坪単価：111 円 12 銭/坪。
- 2 祝儀は金銭と物品による。金銭のみの小計は 145 円であった。物品は今回、祝儀返しの額面より金銭として換算が可能で、約 431 円となった。物品による祝儀は全体の 75%で、祝儀における金銭と物品の割合はおおよそ 1:3 であった。
- 3 以上により、祝儀金額の合計は約 576 円となり、建築総費用に対する割合は 10.6%で全体の約 1 割に達する。

本論で取り扱った一連の文書を読み進めていくと、近代末期の町場においても「普請」本来の言葉の意味である「広く大衆に請う」²⁸の行為が踏襲されている事実が判明した。上棟式など建築儀礼に地縁血縁関係者から祝儀を頂くという慣例がその名残といえよう。上で見てきたように、近代末期における町家の建築に際しても、祝儀金額の合計は建築総費用の約 1 割にも達する例のあることが本研究で明らかとなった。建築資金を他人の負担によって補うことは相互扶助・団体的共同奉仕といっても過言ではない。但し、その行為は、労働力の供給ではなく、すべて金銭・物品の提供に留まるものであることから、建築という行為が完全に貨幣経済の波に飲み込まれてしまっていることも否定はできないが、その傾向は既に近世において見られたものであった²⁹。なお、今回扱った資料では金銭による祝儀返しの記載が見られたが、近世の相互扶助と比して、これは極めて近代的な行為といえるだろう。

このように、近代末期の町場における「建築」は貨幣経済の下に成り立ってはいるものの、「普請」本来の言葉の意味からは完全に脱し切ってはならず、このような意味で特に今回扱った建築工事は「普請」と「建築」の両側面を未だ備えているといえよう。

謝辞 調査を通じ、橋本市及び所有者である上田家他の方々等にお世話になった。また、宮澤智士先生には細部にわたりご指導いただいた。記して謝意を表したい。なお、本研究は平成 12 (2000) 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (C) (1) 12650648 の助成による研究成果の一部である。

注

¹ 調査結果は以下の報告書として刊行された。
橋本の町と町家の研究会編：『橋本の町と町家 中心市街地伝統的町並み調査の記録 1999-2002』、橋本市、平成 14 (2002) 年 3 月

² 以下、本稿では「中央棟」と称する。

³ 祝儀の意味は(1)「祝いの儀式。特に結婚式」、(2)「祝意を表すために贈る金品。引出物」、(3)「(芸人・職人・女中などに与える) ところづけ。はな」(広辞苑：岩波書店)とある。C「祝」では近隣、親類等からの祝意として(2)、施主から職人へのところづけとして(3)の両方が記載されるが、以下、本稿では特に注記しないものは(2)の意味で用いる。

⁴ 以下、本稿ではこれらをまとめて「普請文書」と呼称する。

⁵ 以下、本稿では近代末期の建築関係文書を「普請・建築文書」と呼称する。なお、「普請」と「建築」の語を併記した理由は本稿「7 おわりに」にて詳述した。

⁶ 日本銀行新潟支店長宅 (新潟県新潟市、昭和 8・1933 年建築) の調査報告では、建築調査に加え、棟札や関係する図面・仕様書の整理・考察が行われている。この事例においては、建築家が存在し、設計者と請負者が分離しており、詳細な見積が行われ、請負工事として設計図書に従って建築が行われているとされる。

宮澤智士：日本銀行新潟支店長宅の価値調査について、「長岡造形大学デザイン研究センター平成 11 年度活動報告」、pp.16~18、平成 12 (2000) 年 8

月

⁷ 宮澤智士編：『近代和風建築 智頭の石谷邸』、智書房、平成 13 (2001) 年 3 月

石谷家住宅（鳥取県智頭町、町指定有形文化財）の大正 8 (1919) ～昭和 4 (1929) 年まで 11 年にわたる建築工事は、敷地、家屋を一新する大工事であった。建築関係文書、各種設計書・仕様書、棟札、古写真、設計図等、膨大な資料が残されている。なお、同書 p. 73 によれば、主屋は昭和 3 (1928) 年に一応の完成をみたとされる。

⁸ 脚注 7、p. 186。これに倣い、本稿では近世における民家の建築工事を「普請」、近代における建築工事を「建築」と呼称する。なお、「普請」の語については脚注 28 にて詳述した。

⁹ 厚木市古民家調査委員会編：『厚木市文化財調査報告書第 21 集 厚木の民家(3)』、厚木市教育委員会、昭和 54 (1979) 年 3 月

同書では、慶応 3 (1867) 年～大正 2 (1913) 年にわたる（慶応年間）ものは工期が明治 5・1872 年までとなっているため近代に含んだ）、6 軒 8 冊の普請文書の読み下し文と解説が掲載される。対象となる建物は、主屋だけでなく土蔵、物置といった付属屋を含むが、近代の民家普請の傾向を探ることができる。8 冊の内、祝儀の記録が残るものは 6 冊を確認できる。他人よりの贈答品を上田家では「祝儀」としていたが、厚木市の文書では「見舞」「進物」という語が使用される。なお、「蔵普請帳」（慶応 3・1867 年、座本東良氏蔵）によれば、近代初期には既に「進物」として金銭が贈られている。

¹⁰ 三田家住宅（大阪府柏原市、明和 3・1766 年建築、国指定重要文化財建造物）には 5 点の普請文書が残り、建築費用と祝儀について以下の論考・資料が見られる。

吉田高子、林野全孝：「柏原市三田実家の普請について」、昭和 41 (1966) 年度（東京）大会学術講演要旨集 日本建築学会論文報告集（臨時増刊）・号外、p. 733。主として普請の費用・工期・職人の手間を整理する。

柏原市役所：『柏原市史』第五巻史料編(Ⅱ)、pp. 105～114、昭和 46 (1971) 年 12 月。「普請中祝儀諸事覚帳」の読み下し文が掲載される。

宮澤智士：『近世民家普請の研究』、私家版、pp. 47～54、昭和 56(1981) 年 7 月。普請の進行状況とそれに伴う行事や儀礼を中心に、人々の普請への関わり方を考察し、この中で普請見舞・祝儀とその返礼について整理する。建築資材は全て購入される。普請にかかわる実質上の仕事は職人が行い、近世農家において相互扶助で行っていた労働は「手伝」と呼ばれる一種の職人としての職職が行ったとする。このため、町衆は普請の儀式（石搗き、上棟式、普請見舞など）に参加するが、近世農家の普請のような相互扶助的な労働力の提供は行わない。祝儀は銀銭ではなく、全て物品とし、酒・魚類など食物が大部分で、縄を持ってくるものが少数ある。なお、祝儀の品物には符牒を用いて、その評価額を記入するものも多いが、祝儀の返礼は、上棟の日に各家へ配った赤飯とする。

¹¹ なお、通り土間傍らには出入口を持つ。これは、現在使うことはできないが、かつては東側に半分が残された旧主屋との往来に用いたとされる。

¹² A「建築用金銭出入簿」に「倉ペランダ棟上ニ付一パイ飲マス」とあり、ペランダは昭和 9 (1934) 年の中央棟建築と同時に設置されたことが判明する。

¹³ 延べ床面積には中庭、ペランダ、土蔵の床面積は含めない。なお、昭和 9 (1934) 年の工事範囲は D「材木控」に記載される柱の寸法（太さ、長さ）と本数より明らかにすることができ、土蔵は工事範囲に含まれないことが明らかとなる（図 4～6）。土蔵は中央棟建築の際に敷地内で曳家されたとの聞き取りもあったが、文書にはこのような記載は見られなかったため、真偽は定かではない。詳細は以下の論考による。

梅嶋修ほか 3 名：「橋本市上田家住宅に見る普請帳と建物の実際」、2001 年年度大会（関東）学術講演梗概集 F-2、日本建築学会、pp. 455～456

¹⁴ 兵庫県教育委員会：『兵庫の民家-播磨地区調査概報-』、p. 2、昭和 44 (1969) 年 3 月

¹⁵ 各文書とも表紙は毛筆書きとする。

¹⁶ ここでの「祝儀」は脚注 3 の(2)(3)両方を指す。

¹⁷ 左官工事完了としては上棟式からの乾燥期間が短いため、屋根工事完了の可能性が高い。

¹⁸ B「材料買入日記」に「陳列や 藤村顯三」と記載があり、ラワン、ニス、ラック等を購入している。商品陳列棚を作る内装業者と思われる。

¹⁹ なお、同じ橋本市中心市街地内の池永一子家住宅（主屋、土蔵が国登録文化財）にも普請・建築文書が残され、主屋、貸家を建築した際の祝儀を控えた「本宅貸家普請上棟祝儀控」（昭和 11・1936 年 3 月 28 日）が同様の体裁を採っている。この文書では贈答者氏名、祝儀品名が先ず控えられ、後日異なる種類のインクにより、「内祝」としての祝儀返し金額、品名と◎（末筆として「◎印ハ祝儀貰ヒシ分ナリ」の記載）が書き加えられている。

²⁰ 上田家の祝儀返し 1/10 に対して、脚注 19 に記した池永一子家では約 1/2 の返しとなっているため、祝儀返しの割合は必ずしも一定ではなかったようである。

²¹ 但し、複数の物品が組み合わされて贈られ、一方の物品が金銭に換算できる場合は、その換算額を最低金額として挿入した。

²² 週刊朝日編：『値段の明治大正昭和風俗史 上』、朝日新聞社、p. 159、昭和 62 (1987) 年 3 月

なお、同書 p. 245 に昭和 8 (1933) 年のビール大瓶 1 本の小売標準価格が 33 銭と記されるため、表 1 に反映させた。

²³ 石原保秀：『米價の變遷 續篇』、株式会社モノグラム社、「参考諸表」p. 7、昭和 52 (1977) 年 2 月（復刻版、原本初版は昭和 10・1935 年）

²⁴ 碓正夫：『米価問題—米価の歴史—』、株式会社弘文堂、p. 138、昭和 33 (1958) 年 12 月、「第 18 表 a: 自作者の米生産費と米価の動向(1 石当たり)」、同書によれば「本表の目的上自其年 11 月 1 日至翌年 10 月末日を故意に採った」とされることから、上田家の上棟式が行われた昭和 9 (1934) 年 4 月以前に生産されている昭和 8 (1933) 年の玄米価格を採用した。

²⁵ 換算価格と実勢価格の比較照合は行ったが、全国平均や東京での価格を対象としたため、地域的誤差が考えられる。親類、交友関係によって、「返し」の割合が変動する可能性も考えられる。また、金額が算出されない物品も僅かに残るため、物品の換算額は凡その値でしかない。但し、資料・文献によって当時の実勢価格に根拠が得られた物品の換算額は、物品の総換算額に対して約 9 割となるため、大幅な誤差にはならないと考えた。

²⁶ 『近世民家普請の研究』、脚注 10 参照。

²⁷ 脚注 9 参照。

²⁸ 「普請」という言葉は本来仏教用語であり、禅寺において「広く大衆に呼びかけて労役に従事してもらうこと」、「禅の修行者が総出で労役に従うこと」（時代別国語辞典室町時代編：三省堂）、「大衆に請うて堂等の建築などの労役に従事してもらう」（広辞苑：岩波書店）といった意味があり、これが転じて一般に建築・土木工事を総称することとなったとする。

²⁹ 『近世民家普請の研究』、脚注 10 参照。

(2003 年 9 月 9 日原稿受理、2004 年 3 月 15 日採用決定)